

例会記事

十二月例会 十二月十七日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

(十二月例会は蘭学資料研究会との合同で行なわれた)

一、幕府医学館の考試弁書『癩癩狂弁』について

— 当時の精神病学説をみる —

二、肉食及び菜食と仏教との関りあいについて

— 日本とインドとの比較 —

三、現代文「蘭学事始」と四十年余

一月例会 一月二十一日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

(一月例会は蘭学資料研究会との合同で行なわれた)

一、蘭医ボンベと日本—ボンベ—書簡を中心に— 宮 永 孝

二、江戸時代の儒者と蘭学者の交友 齋藤竹堂の場合

富士川 英郎

二月例会 二月二十五日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

一、ボンベがもたらした頭蓋骨のその後の現地調査

神谷敏郎・金沢英作

二、講座制の歴史

三月例会 三月二十四日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

(三月例会は蘭学資料研究会との合同で行なわれた)

一、尾本涼海(公同)について

田崎 哲郎

二、三浦梅園の手紙—麻田剛立に—について 小川鼎三・酒井シツ
三、明和八年三月四日 緒方 富雄
四月例会は総会に替える

例会講演要旨

前野良沢と杉田玄白

緒方 富雄

一 前野良沢(一七二三—一八〇三)については岩崎克己氏の古典的な著書『前野蘭化』(昭和十三年九月(一九三八))に詳しい。

これから述べることは一部同氏の著作と重複するところがあるが、このたびの前野良沢没後百八十年記念会の機会に特に杉田玄白とのかかわりあいに関心をあわせて良沢を想起したい。

杉田玄白(一七三三—一八一七)の「蘭学事始」(一八一五)に良沢のことが出てくるのは、蘭学の発達の記述のはじめの方で、

「翁が友豊前中津侯の医官前野良沢といへるものあり」

にはじまり、その性格を「天性奇人」とし、玄白との出遇いまでの経歴をかなりくわしく書いている。

二

そして、明和三年(推定)の春、ちょうどカピタンが江戸参府で本石町の長崎屋に泊っていた時、良沢が玄白の宅を訪れて、これからカピタンにあいに行くが、一緒に行かないかと誘う。玄白は好奇心をそそられ、良沢にとまなわれて出かける。それが、玄